

宮城教育大学

導入の目的

東日本大震災において全国の大学からの支援により平時のように情報保障支援を続けることができました。緊急時の体制整備に限らず、大学の講義の関係で生じてしまう時間による支援学生の偏り(支援者不足)、野外活動や教育実習など支援者の派遣が難しい場面での情報保障にも大きな効果が期待できるのではないかと考えています。

運用の詳細

・使用したシステム

①モバイル型遠隔情報保障システム

地層観察における野外活動にて使用

本学 ←→ 青葉山[宮城県仙台市]

②遠隔支援サーバーシステム

大学間で支援者の偏りを解消するために、相互の講義に一人ずつ支援者を出し情報保障を行っています。

本学 ←→ 愛知教育大学[愛知県刈谷市] (2012,2013)

日本社会事業大学[東京都清瀬市] (2012)

使用した場面



利用実績、独自の工夫、苦労した点

[工夫]・講義に影響がない範囲で、利用学生にも支援学生のサポートをしてもらいました。(電話・ネットへの接続、資料の受け渡し)

・当日配布される資料を毎回送付するのは難しいので、学外の支援学生は資料なしでも支援ができるよう現地の学生がその点をフォローするよう体制を整えました。

[苦労]・機材やシステムの知識がないので操作に慣れるまではつながらない時の対応に不安を感じました。

得られた効果

・事前資料の有無が情報の質を大きく左右するので教員へ資料の提供を依頼したところ、協力してくださる教員が多く、その後学内支援に戻ってからも色々と気にかけてくださるようになりました。教員への理解促進の機会ともなったように感じています。また、他大学の学生とやり取りする中で、情報保障に関する考えやルールを再考する機会となりました。そして、支援方法の選択肢が増え、情報保障が必要な場面でもより良い支援方法を検討できるようになりました。

教職員、利用学生、支援学生の声

[教員]支援者が目の前にいないのに、いつものように文字情報が出ているのは不思議な感覚でした。講義でSNSの活用を話題にしていたこともあり、遠隔からの情報保障が『つながっている』という実感をもたせてくれました。

[利用学生] ノートテイク、パソコンテイクでは解決のしようがない問題を遠隔通訳の存在で解消できました。遠隔通訳でさらなる可能性が広がったと言っても過言ではないと思います。

[支援学生]遠隔通訳だからこそ他大学のテイクの技術や考え方を知り、実践できることが最大の面白さです。